

始まっています 地域内交流!

様々な世代と交流することで地域の結びつきが強まる! 学園台ふれあい・いきいきサロン

平成19年に発足した学園台ふれあい・いきいきサロンでは、納涼祭や餅つき大会、ゲートボール、学童のお別れ会などを行っている。各事業は、自治会役員6人、班長14人で構成される地区役員が中心となって運営され、子供会育成会や高齢者の福寿会が協力する形で実施されている。



餅つき大会の様子

「年の初めの餅つき大会では、地区内の人から杵と臼、蒸籠などの道具を借りて、昔ながらの方法で、餅つきを行います。2升餅を10回に分けて子どもや高齢者などが餅をつき、あんこ餅、納豆餅、からみ餅、きなこ餅などを皆で作って食べます。お餅は大量にできるので、残りはパック詰めして、参加できなかった人に配ります。なお、からみ餅に使う大根やみかん、白菜、漬け、焼酎などを差し入れてくれる人もいますので、とても助

かっています。また、餅つき大会に参加した高齢者は、餅つきを懐かしがってくれて、止めないで、続けてくださいと言ってくれる人もいます」と高橋区長は語ってくれた。

「このほか、子どもと高齢者でゲートボールを通じた交流も行っています。子どもと高齢者が楽しく交流することが目的なので、子どもが第1ゲートを通過しなかったときは、距離を近くしてあげる工夫などもしています。そうすることで、子どもも楽しそうにプレーを楽しむことができますのです。また、「年度末には、小学6年生とのお別れ会を行っています。小学6年生の子どもと小学1年生になる子ども、そして高齢者を交えて実施しています。お別れ会では、小学6年生が、今までのことを振り返って想い出を語ります。なかには、いじめを受けていたが、克服できたことなどを話す子どももいます。とても充実したお別れ会になっています」。

最後に、「今後もふれあい・いきいきサロンが継続できるように、次期区長へ引き継ぎ、OBとして各事業を手伝いたいと思います」と高橋区長は話してくれた。

お山歴史教養 文化財シリーズ212 やぶさめサミット余話

～子どもと流鏑馬～

やぶさめサミット参加9団体のうち、毛呂山町を含めた3団体では子どもの流鏑馬が行われています。子どもを流鏑馬の射手とする場合、流鏑馬は武芸というより、神の意志を占う側面が強くなる傾向にあります。それは子どもの年齢が低くなるほど顕著になります。

子どもと民俗

子どもが民俗的な行事に関わる場合、子どもの健康・成長を願うものが多く見られます。たとえば、背負い餅、歯固め、七五三などです。

しかし、子どもが弓を射る行事では子どもの健康や成長を願うという以上に、子どもが魔を払う役目をしたり、神となって矢を放ち、占いを行い、神意を問う行為をします。これは「七つ前は神の子」といわれるように7歳未満の子どもは神に近い存在であるため、清らかな子どもが放った矢と的是利益のあるものとなるのです。

馬に乗って射る行事は流鏑馬と呼ばれますが、馬に乗らずの魔に見立てて射る行事は歩射(ブシヤやおビシヤと呼ばれる)といえます。

一方、馬に子どもが着飾って乗っているものの、まったく矢を射ることなどしない場合もあります。これは着飾った男児が馬に乗っているだけで、神の存在を表しているものです。「ヒトツモノ」などと呼ばれ、古くから春日大社の若宮おん祭にも登場します。

流鏑馬と子ども

また、流鏑馬にはほかに子どもが登場することがあります。ときがわ町の萩日吉神社の流鏑馬では子どもが「矢取り」の役目を担っています。ときがわ町の場合、「矢取り」の子どもは上座に座らせるほど重要視されており、流鏑馬は行わなくとも、子どもが重要な役割りをになっています。

毛呂山町の流鏑馬は子どもが乗り子となり、武芸としての流鏑馬に近い勇壮なものですが、その根底には乗り子に神の使いとしての意味が備わっていると考えられます。



春の流鏑馬・幼児が乗り子を務める。頭上には母の象徴・オカイドリ